

「神の恵みと互いの支え」

ピリピ4：14-23

堀田修一 22・5・1

I 神の素晴らしい恵み、驚くべき恵み「私の神は、キリスト・イエスの栄光のうちにあるご自分の豊かさにしたがって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます」：19。

1. 願ったものをではなく、真の「必要を」満たして下さい。ここに深さがある。私達は、自分では、真の必要がわからず、別のもの、単に欲しいものを求めてしまう。しかし、私達の神は、私達に真に必要なものを知り、満たして下さい→「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです」(マタイ6：8)。私達が成長して行くという事は、自分にとって何が本当に必要であるかを識別できるようになる事。神によって真に必要なものを与えられている人は、ある意味で→「すべての物を受けて、満ちあふれている」人。18節のパウロのように。獄中にいてさえ、本音でそう言えた。収納しきれないほどの多くのものを持っていて、欲深く物に執着し縛られている人より、神によって真に必要なものが、一日一日、与えられ、それらを当然と思わず、心から感謝し、それらを神の前に正しく用いる人は、真に心の豊かな人。「感謝の心を持つ人になりなさい」(コロ3：15)。

2. 神が満たして下さい必要。

①霊的必要：罪の赦し「この方によって私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています」(エペソ1：7)。永遠のいのち「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ3：16)。永遠に変わらない愛、喜び、平安(ガラ5：22)、聖なる力、思慮分別(Ⅱテモ1：7)。

②物質的必要：日毎の糧「私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください」(マタイ6：11)。「あなたがたの天の父は、それ(食べる物、着る物)がみなあなたがたに必要なことを知っておられます。だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それ(神の国とその義)に加えて、これらのもの(日毎の必要)はすべて与えられます」(6：32、33)。

Ⅱ 神の恵みへの応答。

1. 「私たちの父である神に、栄光が世々限りなくありますように。アーメン」：20。アーメン：神の名によって語られた言葉や神に向かって祈られた祈禱、賛美に対し同意を示す語。本当に、確かにの意。「アーメン(真実)である方」黙3：14。神に心から感謝したい。与えられて当然のものは何一つない。すべては恵み。すべての栄光を神に帰す。願う時だけ一生懸命ではなく、守られた後にも、すべての栄光を神に帰し心から神をほめたたえたい。偉大で恵み深い神を心から礼拝したい!

2. 神から受けた恵み、愛を感謝し、互いに支え合う。

①主にあって困難を分け合う。「それにしても、あなたがたは、よく私と困難を分け合ってくれました(原語：共に与かる、共に参加する)」：14。主にある喜びは、分かち合うと増し、困難は、

分け合うと軽くなる。困難な時も、共に参加する人々がいると大いに助けられ励まされる。

②福音宣教の働きの為に必要なものを支援する。当教会は、神の摂理、ご計画により OMF 宣教会の宣教と支援で始まった。それから北海道福音教会協議会（ECA）に加盟し、互いに交わり支え合い、次に4団体の連合である日本福音キリスト教会連合 JECA に加盟し、互いに交わり支え合っている。また、有澤師ご夫妻を支援することにより世界宣教に参加させていただいている恵みを感謝したい。「ピリピの人たち。…私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。テサロニケにいたときでさえ、

あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくださいました」：15—16。ピリピの人達は、富んでいて恵まれた状況の中でささげたのではない。「マケドニヤ（ピリピ、テサロニケ、ベレヤ）の諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。…彼らは、自ら進んで、力に應じ、いや力以上にささげ、聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。…神のみこころに従って、まず自分自身を主にささげ、また、私たちにもゆだねてくださいました」（Ⅱコリント8：1—5）。「それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です」：18。人への愛ある贈り物は、神への香ばしいかおり、供え物である。
※本日の応答の賛美「互いに愛し合い 主イエスの愛を 進んで世界に あらわそう共に 日ごとに新たな きよい主の愛 さあ今手を取り あらわそう」

3. 「よろしく伝えてください（原語の意：挨拶する、歓迎する、いらっしゃいませと言う、別れを告げる、挨拶の言葉を送る、よろしくと伝言する）」との心からの言葉。主にある交わりの広がり。パウロは、神との交わりを第一にし、人の交わりも大切にした。※ある人の聖書的な助言「人との交わりだけをしている人は、神との静かな交わりも大切にしてください。神との交わりだけで十分という人は、主を中心にした人々との交わりも大切に作るバランスを持って下さい」。「もし私たちが、神が光の中におられるように、光の中を歩んでいるなら（神の自分の罪を告白し神との交わりの中を歩んでいるなら）、互いに交わりを持ち、御子イエスの血がすべての罪からわたしたちをきよめてくださいます」（Ⅰヨハネ1：7）。「キリスト・イエスにある聖徒のひとりひとりに、よろしく伝えてください。私といっしょにいる兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。聖徒たち全員が、そして特に、カイザルの家に属する人々が、よろしくと言っています」21, 22。パウロは、各手紙の最後には、「すべての兄弟たち（聖徒たち）が、あなたがたによろしくと言っています」と言っている。直接会える時は、心から愛の挨拶をする人は幸いである。挨拶は、ただの言葉ではない。お互いの心の扉を開く一歩である。心に愛と喜びが生まれる。※証し。会えない人には、「よろしく伝えて下さい」と心からお願いしたい。その心は通じる。パウロの多くの手紙では、前半に神の恵みを記し、後半に、神の恵みへの応答としての人の関係、人との交わりについて記す。本当の著者である聖霊なる神に導かれて。この順序は、十戒（前半：神との関係の戒め。後半：人との関係の戒め）と主の祈り（前半：神との関係の祈り。後半：人の必要や人との関係の祈り）に通じる。

4. 「どうか、主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように」：23。主の驚く恵みを受け、それを自覚し、感謝している者は、他の人にもその主の恵みがあるように

心から祈る。主の恵みに優るものはない。この祈りを私達が互いに祈り合う時、神は祈りに答え、恵みを与えられる。人間的に見れば、恵まれているとは言えない獄中にいても、パウロは主の恵みを獄中でも受け満ち足り（罪人のかしらであり滅んで当然の自分を救われ今日まで支えられた主の驚くべき恵みと主ご自身を喜ぶ満ち足り）、「どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように」：2と記し始め、：23の祈りで終わる手紙。それは単なる言葉ではなく、心からの祝福の祈り。私達も、主の驚くべき恵みを心から感謝します！

祈り：私たちも、先ず私たちを恵み愛して下さった神との交わりを大切にし、神から愛を受けつつ、人々との交わりも大切にし、愛の挨拶をし合い、苦難を分け合い、神から与えられたものを分け合い、互いに愛し合い助け合う者として下さい。